

第24期 日本学術会議 健康・生活科学委員会／臨床医学委員会
少子高齢社会におけるケアサイエンス分科会 議事録（概要版）

日時：2018年7月24日 10:00～12:00

場所：日本学術会議 5-C(2) 会議室

出席者：小松、岩崎、井上、川口、正木、西村（記録）

傍聴：永瀬（説明人）

欠席：寶金

資料

- ① 少子高齢社会におけるケアサイエンス分科会（24期）
- ② 7月26日幹事会提案資料（委員の追加）
- ③ 第1回分科会議事録（概要版）
- ④ 第1回分科会議事録（詳細版）
- ⑤ 小松委員発表資料「ケアサイエンスを考える——身体活動量増加のためのコミュニティ・ワイド・キャンペーン：「ふじさわプラス・テン」プロジェクトを例に」
- ⑥ Komatsu, H., Yagasaki, K., Saito, Y & Oguma, Y.(2017). Regular group exercise contributes to balanced health in order adults in Japan: a qualitative study, *BMC Geriatrics*, 17:190 DOI 10.1186/s12877-017-0584-3
- ⑦ 西村委員発表資料「マーサ・ヌスバウムのケイパビリティとケアサイエンス」
- ⑧ 堀田聰子氏参考資料「オランダのコミュニティケアの担い手たち（前編）在宅ケアヘルネサンス——Buurtzorg」(医学書院、週間医学会新聞 2986)「よりよいケアを希求する「船」としてのビュートゾルフ」(訪問看護と介護、21(5)、2016)

【審議事項】

(1) 幹事会報告と分科会委員の確認

資料①②をもとに、分科会委員が確認され、各委員による自己紹介が行われた。永瀬委員については、7月26日の幹事会で本分科会委員として提案する予定である。

資料③④をもとに、①少子高齢社会におけるケアサイエンス分科会設置の経緯、第1回分科会の議論および今後の方針が確認された。

本日発表予定であった堀田氏については、別の機会に発表を依頼する予定である。

(2) ケアサイエンスの実装についての報告および検討

1. 小松委員長による発表

資料⑤⑥を用いて、神奈川県藤沢市におけるアクティブガイドを活用したコミュニティ・

ワイド・キャンペーンが、住民の身体活動量増加につながるか否かを明らかにするためのク
ラスター・非ランダム化試験（「ふじさわプラス・テン」）の内容と、そこに参加者した高齢
者へのフォーカス・グループ・インタビューの成果が報告された。

質疑応答では、介入プログラムの効果につながる理由、活動の持続に必要な魅力と基盤、
参加市民の特徴、参加を促すアピールの方法、介入の仕掛けのユニークさ、見出されたモデ
ルの応用可能性、市民やコミュニティへの成果等の周知方法、実践を分かりやすく伝える媒
体、研究事例のケアサイエンスとの関係などが検討された。

2. 西村委員による発表

資料⑦を用いて、マーサ・ヌスバウムとアマルティア・センのケイパビリティ概念とその
違い、およびケアサイエンスへの導入可能性について報告。ケイパビリティ（潜在能力）ア
プローチの考え方は、ケアサイエンスにかかわる活動が目指すべき方向性として考えるこ
とができる可能性があることが提案された。

質疑応答では、社会福祉や教育におけるケイパビリティの導入、ケイパビリティの考え方
にケアを入れること、高齢者の個々のケイパビリティ（潜在能力）が多様であること、ケイ
パビリティが活用可能な次元、ケイパビリティをもとにケア専門家の発想を組み替える必
要性、日本の高齢社会の課題にケイパビリティを取り入れる可能性などが議論された。

以上の発表と質疑応答を受けて、以下の方針が小松委員長によって提案された。

ケアには多様な次元があり、専門分野や注目する場によって異なっていることが見えて
きた。その次元は、少子高齢社会におけるケアサイエンスを考えるうえで重要であると思う。

次回は、社会福祉と経済学の立場から、岩崎委員と永瀬委員に、ケアサイエンスにかかわ
る事例を発表してもらい、シンポジウム企画を検討したい。

【次回の分科会】

日時：9月11日（火）10：00～12：00

場所：日本学術会議

検討事項：岩崎委員、永瀬委員による発表